アクティオトランスポート協力会レポート(2016 年 5 月)

積み下ろし作業中の災害防止

1 土木工事で最も死亡災害が多いのは重機の稼働時ではなく移動時。

(住友建機ホームページより引用)

平成16～18年のデータによると、重機の移動等(トラック等運搬作業含む)で67人も亡くなっており、これが死亡災害の多い作業の1位です。皆さんが危険だと思っているクレーン、バックホウ等による荷揚げ・荷下ろし等(48人、3位)や、掘削(36人、4位。注＝土砂運搬を除く)、舗装(26人、6位)、整地・敷き均し・盛土(24人、8位)などよりずっと多いのです。

具体的には

仮置きしていたバックホウが邪魔になったので、これに乗り込んで動かそうとしたところ、路肩が一部崩れ、バックホウが約4メートル下の谷川に転落。

トラックへのバックホウ積み込み作業中、荷台から道板が1枚外れてバックホウが転倒、作業者がバケットの下敷きに。

作業終了後、道路を開放するために、バックホウを空き地まで移動させていた際、交差点を左折したところで誘導員が挟まれた。

といった死亡災害が発生しています。
こうした作業は、作業中ほどの危険性を認識していないため、油断が生じてしまうのでしょう。

油断しがちということでは、測量・写真撮影等で23人(9位)、重機等の点検・整備等作業で11人(16位)が亡くなっている点にも注意しなければなりません。

測量や写真撮影をしている人が重機に背を向けていたため、後退してきた重機に気付かずに轢かれてしまう。バックホウのエンジンを始動させて状態を確認している際、突然、バックホウの一部が動き出し、修理していた作業員が災害に巻き込まれる。こんな事故が意外に多いのです。

建設機械の中でも、ほとんどの現場で使われるバックホウ関連の事故が多いのは当然ですが、その動作別死亡者数を見ても意外な結果が出ています。

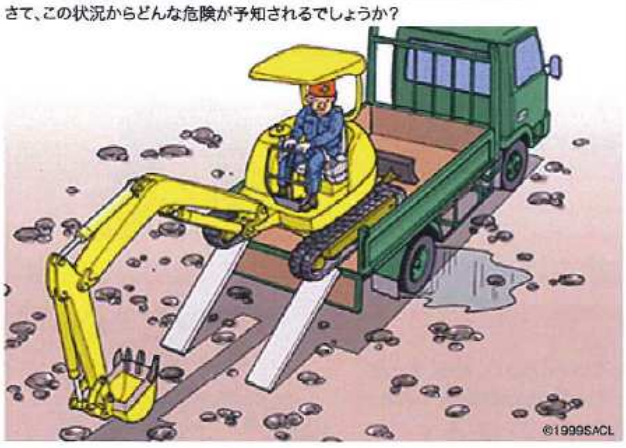
掘削作業では、バックで轢かれた事例が35人と最も多く、旋回等による災害の17人(2位)を大きく上回っており、荷揚げ・荷下ろし作業でも、1位は転倒によるもの20人、2位は吊り荷の傾き・落下等13人で、旋回時の接触等は8人で3位です。(いずれも平成13～18年のデータ)バックホウで最も危険なのは旋回時ではないわけです。というよりも、危険性の高さを認識している作業には十分な注意を払っているから事故率が低くなっていると言えるでしょう。

また、下図の作業のように積卸の際に**使用する歩み板(アルミブリッジ)にも使用前点検を必ず実施しましょう。**よく聞くのは、車輌に引っ掛けるアングル部の腐食等によりいきなり破断、転倒したというケースです。**許容加重も考慮し、機械にあった用具**を使用しましょう。

リスクが低いと思われている作業の中にも、実はリスクが高いものがあるところに安全対策の落とし穴があります。**単なる移動であっても危険が潜んでいるのだということ**を、ぜひとも肝に銘じていただきたいものです。

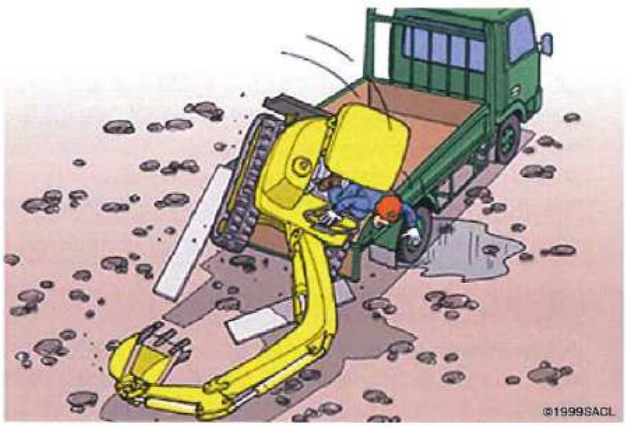
この状況で予知される災害は？

工事現場の地盤が悪いところで、2トントラックの荷台からドラグ・ショベルをおろそうとしています。地上から荷台には2本のアルミ製の道板を掛け渡しています。
さて、この状況からどんな危険が予知されるでしょうか？



こんな災害が発生しました！

道板が急に外れ、ドラグ・ショベルが横転し落下、
運転員が下敷きになりました。



災害発生防止のポイント

1 重機の積卸は平らで固い場所において行う。
2 道板を使用するときは、十分な幅と強度をもったものを使用する。または、道板は適切な勾配で確実に取り付ける。

御社の安全啓蒙活動にお役立てください。 株式会社 アクティオトランスポート